



愛川ふれあいの村 今月の風景

## 2020年12月 自然のたより

寒さも厳しくなり、雪がちらついた日もありました。師も走る月、キク科の花も終わりをづけ、木の実や鳥が目立ち始め、忙しさの中でも自然の移ろいを感じます。数年前にかけた巣箱にはようやくムササビが来ました。後半にもなると葉も落ちて、すっかり冬景色。グラウンドには初観測となるコチドリらしき鳥がせわしく駆けまわり、冷え込みの強い日には大きなシモバシラができていました。(石川)



シモバシラ



リュウノウギク



ホソヒラタアブ



ムササビ



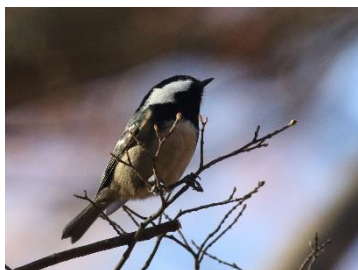
黄葉とカワラヒワ



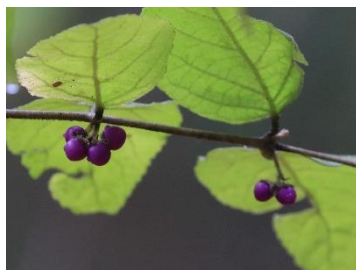
柿食うアオゲラ



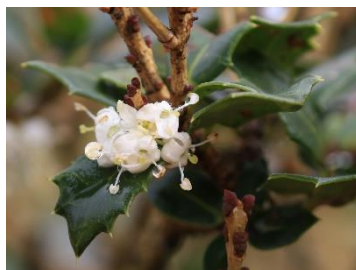
紅葉とコゲラ



ヒガラ



ヤブムラサキ



ヒイラギ



コチドリの氷上ダマ



モミジとクモ



ツルウメモドキ



センニンソウ



ヒヨドリのケンカ



## トピックス ★シラカバ★

村にある宿泊棟の一つ、しらかば棟の周りには、棟の名の通り『シラカバ』が生育しています。

薄くはがれる白い樹皮が特徴的な木で、高さは10~25mほど。北海道やサハリンなどの寒冷地方に多く生えているそうです。高原の風景を象徴する木として知られており、「高原の白い貴公子」とも呼ばれています。

山に囲まれているため、神奈川県の中では比較的寒冷な地域の愛川町。しかしいくら寒くても、シラカバが自然に生えてくるような土地ではありません。シラカバは、愛川ふれあいの村が建設されたとき、植樹されたそうです。当初、宿泊棟はそれぞれA棟、B棟、C棟という名前でした。しかしそれでは分かりづらくなり、A棟は『りんどう』という花、B棟は『せきれい』という鳥、C棟は周りに植樹されていた『しらかば』の名を用い、現在までその名が受け継がれているという説があります。

私がふれあいの村に来たとき、シラカバを初めて見て、とても驚いたのを覚えています。木の幹は茶色。その固定概念が覆された瞬間でした。事務所で作業をしているとき、ふと窓の外を見ると、シラカバが見えます。春夏の新緑、秋の黄葉。様々な姿を味わうことができました。

冬のシラカバも、澄んだ空の下でいっそう美しく佇んでいます。シラカバと白い雪。これもまた幻想的ですね。愛川での初雪はいつかと待ちわびる、今日この頃です。

(三好)



オオムラサキ



ゴマダラチョウ

来月の見どころ **虫たちの冬越し**  
昆虫たちにとって、最も厳しい冬がやってきた。この寒い冬を乗り越えることを越冬と言いますが、実際に虫たちはどのように過ごしているのだろうか。  
①カマキリやバッタ(例外的にツチイナゴやクビキリギスは成虫越冬)の仲間、卵で過ごす。  
②オオムラサキやゴマダラチョウ、カブトムシやカミキリムシなどは幼虫越冬。  
③アゲハチョウやウスタバヒバは蛹越冬。  
④カタテハやキチヨウ、ホソミオツネントンボなどは成虫で越冬し、天気の良い暖かな日には飛んでいる姿を見かける。さて、夏の頃クヌギやコナラなど樹液の出ている辺りで見かけたオオムラサキやゴマダラチョウはどうしているのだろうかと食草のエノキの落ち葉をめぐってみると葉っぱと同じ色をした2ヶ月ほどの幼虫がやっと見つかった。時間をかけてさらに探すとゴマダラチョウの方が多く見つかった。オオムラサキやゴマダラチョウの成虫はあまり見かけなかったが、案外いるものだと思った。  
しかし、卵から幼虫そして蛹から成虫へと成長していく過程でいろんな困難にぶつかり数を減らしているのだろう。厳しい試練に立ち向かう小さな幼虫を見守ってあげたいと思った。

## 生き物 ★カマキリ★

夏、あんなに沢山いた虫達も寒い冬になるとめっきり見かけなくなりましたね。皆、どこに行ったのでしょうか。実は、今虫達は寒い冬どのように越すか準備の真最中です。卵・幼虫・サナギ・成虫4つに分ける事ができます。

木の枝に薄茶色の泡が固まったような物を見たことありませんか?カマキリの卵です。カマキリは卵を産んで子孫を残して一生を終わります。卵は、餌のない時期を過ごし暖かくなる4~5月頃に羽化し、脱皮を繰り返しながら成虫になっていきます。

身近な公園などで、虫たちが、卵・幼虫・サナギ・成虫で冬をどのように越しているか探してみるのも楽しいですよ。(菅原)



## 旬 ★寒雀(かんすずめ)★

冬といえば様々な食材が「寒」という冠をつけて美味しくなります。寒鱈(かんだら)・寒鰯(かんぶり)・寒鮎(かんぶな)、最近では寒野菜というものもあるそうです。今回のテーマは『寒雀』。

この時期は、冬を乗り越えるため脂肪を貯めてふっくらとした雀が群れているのを観察できます。そのため、『ふくら雀』と言われ、その昔、焼き鳥といったらこの『寒雀』を焼いて食べた食文化が日本にありました。近年は愛鳥思想とともに猟師の高齢化などで雀を食べる習慣は一部の地域を除いてなくなりました。ふっくらとした『寒雀』を見て、「美味しそう」と思っははいけません。ふっくらとして可愛いなと思ひましよう。(高梨)

